いつか本物のステージに立つ——。

夢を手に入れた日々はあわただしく過ぎていった。有希は地元のライブハウスやレンタルスタジオにひんぱんに出入りするようになっていた。音楽仲間も増え、毎日は順調に思われた。

そんなある日、有希は嫌な噂を耳にした。有希とつき合いのあるグループからソボがねらわれていて、ひどいいじめを受けているというのである。理由はそのグループの誰かのボーイフレンドを横取りしたからというものだった。

女子校の下校時の正門前は、連なる車の排気管でやたらにやかましい。彼氏のお迎えというわけだが、その車の１台にソボが乗ったことが、いつしか「寝取った」という噂になったらしい。

ソボに対するいじめは、予想以上にひどかった。授業以外の時間は必ず集団でつけ回して、殴る、蹴る、あげくに土下座を強要する。それは、いじめを通り越して集団リンチに近かった。

気丈なところのあるソボは、そのことをずっと有希には内緒にしていたのだった。

有希はさっそくグループのひとりを呼び出して、問いただした。

「いったいなんでそんなことになってんの?」

「知らないの? アイツ、人の男取ったんだよ」

「取ったって、べつに車に乗ったってだけでしょ」

「車乗ったら、寝たも同然じゃん。だいたいアイツ、男にいいかげんだってすごい評判なんだから」

「私、ソボのことはわりと知ってるけど、そんな評判聞いたこともないけどね」

「有希、これはアイツと私らの問題で、あんたは部外者なんだから、よけいな口出ししないほうが利口だと思うよ」

釘を刺されても知らんぷりできない。放課後、今度はソボを呼び出して聞いた。

「なんで私に黙ってたの?」

「だってアイツら有希とつき合いあるでしょ。あんたに迷惑がかかるのは嫌だしさ」

「関係ないよ。べつに立ち入ったことをするつもりもないけど、この状態はなんとかしないと、ホントにヤバいよ」

「うん。だからさ、私、学校やめちゃおうかなって思って」

「ダメだよ! そんなことしたら、アイツらの思うツボだよ!」

「そうだけど、もういられないもん、あんなとこ」  
 思った以上にソボが受けているダメージは大きかった。でも、そんなことで大事な親友を失いたくない。それ以上にソボの将来にかかわることだと思うと、有希は黙っていられなかった。

「だったらさ、こうしない? とにかく学校はやめない。それで授業以外の時間は、私のクラスにおいでよ。私がいたら、アイツらも簡単に手出しはしないよ」

「うれしいけど、そんなことないと思うよ。男のことになるとアイツら頭に血が上って見さかいないんだから。いくら有希だって、そのうち巻き添え食うかもしんない」

「いいよ、そんときはそんときで。私はアイツらに負けない。だからあんたも負けないで」

ソボは有希の顔を見つめて力なくうなずいた。

翌日から、ソボは休み時間ごとに有希のクラスに来るようになった。１週間ばかりはそれで平穏に過ごせたが、昼休みに一緒にいたところへ、あんのじょう、グループがやってきた。

ざっと有希とソボを取り囲むと、ひとりがじろじろといかにも不愉快そうににらみつけて言った。

「有希、なーんであんた、こんなゴミとメシ食ってんの?」

とたんに萎縮するソボを見て、有希はガタンと席を立った。

「ゴミってどういう意味?」

「ゴミはゴミだよ」

できるだけ気持ちを平静に保ちながら、有希は言った。

「あんたらがソボのしたことで怒ってんのは知ってるけど、私はべつになんにもされてないからね。そういう言い方されるとちょっとムカつくんだよね。ソボが男寝取ったのなんのって私の知ったことじゃないけど、あんたら幼稚じゃない? 誰と一緒にメシ食おうが私の勝手だし、いちいちすごまないでくんないかなぁ」

そこでちょうど、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「そんなヤツかばってろくなことないよ。あんたも男取られるのがオチなんだから」

「ご心配なく。私、男いないから」

グループが引き上げていくと、ソボはせきを切ったように泣きだした。

「泣くなよ、子供みたいに」

あやすように有希はソボの背中を叩いた。

しゃくりあげながらも毅然とした顔でソボは言った。

「私、忘れないから。有希になんかあったら、どんなことをしてでも、私が絶対に助けるから」

「大げさだなぁ。先生来るから、あんたも早くクラスに戻りな」

ソボの背中を押す有希は、それからの人生で本当に何度もソボに助けられることになることを、まだ知らなかった。